



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第24号

徳島 1916年3月5日

イギリスの参戦理由と準備（1）

世界での大規模な大量殺戮の責任はイギリスにあるが、その事実は大戦が初めて明るみに出したのではない。そのための証拠は、ただ戦争が進むなかで提示された。その証拠は、ブリュッセルにあるベルギー外務省の文書のなかにあった。

われわれが手にしているこの証拠物件は、そのうち歴史叙述のためには非常に価値を持つだろうが、しかし上に言ったように、何か新しいことを暴露するものではほとんどない。というのも、ここ数年のドーバー海峡の向う側の出来事を追ってきた者は、戦争の勃発を絶対確実に悟ったに違いないからである。不可避というのは、戦争を決定したのはイギリスの厚顔無恥な政治であり、イギリスがあらゆる手段を用いて計画的にそれを押し進めたからである。重苦しい雨雲のように、イギリスのこの政治が何年間

もヨーロッパを覆い、列強の経済生活に重くのしかかり、それを萎えさせてしまった。そこで、平和を愛するわれわれの皇帝の心が、平和へのかなかな希望が見えるようにその雲を追い払うことに幾度も成功するも、その都度イギリスは希望を窒息させる新たな雷雲を常に創り出してきた。

イギリスがこの政治を行う理由は周知のとおりで、純粹に経済的なことである。ますます危険になるドイツという競争相手を取り除くことが、イギリスには重要だったのである。1870年以降のドイツとイギリスの貿易統計を比較すれば、イギリスのこの願いは説明がつく。少なくともドイツ人の感情にとって不可解なのは、ただ次のような事実である。イギリス人は平和的な競争の中での戦いではなく、また商工業上の有能さによって自分たちの経済的優位を維持しようとしたのではなく、暴力によって競争相手を打ち負かそうとしたのである。そして彼らは、そのような利己的かつ非道徳的な目的のために、大勢の自国民を獲得したばかりか、他の強国の支援をも確保することに成功したのである。

もしわれわれがこうした出来事をもっと詳細に検討しようとするれば、とりわけ誇り高きアルビオンが自己のもくろみを達成するために用いた手段を検討しようとするれば、さしあたって現在のイギリスの統治状況に注目しなければならない。

17・18世紀の戦争、並びにナポレオン時代の戦争は、ヨーロッパ大陸に混乱と荒廃、そして経済的破壊をもたらした。これに対し、島国である大ブリテンは価値の高い植民地を所有し、海洋を支配し、広く海外領域を経済的に獲得した。だが、やすやすと事が成ったのではない！ネルソンという卓越した指導者の下でイギリス艦隊が示した勇敢さと好戦性は当時であって偉大なことを成し遂げたが、そのことと同様に経済的成果もまた、当時のイギリス商人の有能さ、大胆さ、そして賢さがなければ、決して成しえなかったであろう。両方ともに、すなわちイギリス艦隊も商人も、この偉大な伝統を今日ではほとんど受け継いでいないのは非常に哀れなことである。

しかし、その国に流れ込みはじめた金の力は、次のことをもたらした。すなわち、富がますます支配的権力となって全ての理想的な価値を窒息させ、人格の意義と影響力はもはや精神や道德上の特性からではなく、ただ銀行預金の量から評価されるようになったことである。

かくして、国民の公的生活を整える全ての要素を一手に掌握した支配階級、すなわち資産家階級が次第に形成された。この階級は巧みに統治権力をわがものとした。政治家と大多数の代議士はこの階級の出身者であり、大都市行政はこの階級によってコントロールされ、新聞及び劇場でさえこの階級が所有し、彼らの目的のために利用された。同じく、財政も完全にその階級に依存した。H. St. チェンバレンはこの上層階級を1万人、その取り巻きを10万人と見積もっている。そしてこの少数の支配者が、最も自由主義的な憲法を持っていると自慢する4,500万人の国民をほしきままに支配している。

とはいえ、イギリスのような商業国家に見られるそうしたカーストの支配は、カーストを構成している商人、大工業家、鉱山所有者、船主、大土地所有者、銀行家が父祖の伝統に忠実で、有能、勤勉、賢明、実直を保持しつづけるならば、国民にとって不幸であるとは簡単に言えないだろう。もっと以前に別の国で彼らの競争相手が登場していたなら、おそらくそれは事実となったであろう。しかし疲労困憊したヨーロッパ諸国の国民には、イギリスの確固たる優位に対して争うことなど、数十年の間思いもしないことであった。そこで、上層階級の一万人は数世代にわたって、自分たちの父祖の労働の果実がたやすく懷に転がり込むのを当たり前のことと考えていた。このような心地よい安全な境遇に支えられていたため、イギリス人は、統一したドイツが突如として自分たちの競争相手になった時でも目を覚ますことができなかったのである。

さしあたり彼らはおそらく、さし迫る危機に気づかないか、あるいはそれを過少評価していたのであろう。しかし、その危険がしばしば起こるようになり、彼らが今までは自分たちの御料地であると見なしていた領域で、

寓話のなかのハリネズミが野兎に対して言うように、いつも「僕はもう来てるよ！」と叫ぶドイツ商人に出くわした時、彼らの不安は大きくなった。そこで彼らは、自分たちにとって疎ましい存在であった敵を商業政策的手段で排除しようとした。当時、メイド・イン・ジャーマニー法が登場し、イギリスとその植民地へ向けて、あるいはそこを経由して運ばれるドイツ製造の商品全てに、「メイド・イン・ジャーマニー」というラベルを付けることを定めた。この法律は、かえってドイツの貿易を促進させるものであることが明らかになっただけである。というのは、その法律が施行されると、やがてドイツ工業は製品の質の良さの点で能力を発揮し、今や「メイド・イン・ジャーマニー」は当初意図されていたような購買者に対する警告ではなく、むしろ推奨を意味するようになったからである。

つづく

演 劇

エドゥアルト・フォン・バウエルンフェルト作『日記』のお蔭で、われわれは先週の日曜日に楽しい一時を過ごすことができた。

活発で愛すべき演技によって、登場人物の穏やかで軽快な人生観が、演技の期間中ずっと聴衆に乗り移ったように思われた。哲学的な教養を身につけた独身主義者である中年過ぎの男は、女性の自然のままの術に屈服する。それが、このユーモアに富んだ社交劇の筋である。

ちょっとした哲学的教養を身につけたその陽気な大尉は、分別による結婚を望んだ。彼の選んだ女性はそれを知っているが、彼の中に彼女に対する愛を芽生えさせることができると自信を持つ。愛すべき視点を備えた優美な幕開け — 導入部 — である。

その後に — 喜劇らしからぬ — 劇中劇が続く。つまり、彼女は田舎出のおぼこ娘でたわいなくかつ無教養で、持っているものと言えば料理と「農

業に情熱」を少々、というだけの娘を演じてみせるのである。にもかかわらず、彼は彼女と結婚する。演技はさらに続く。はじめての機会を捉えて、彼女は夫の若き友人の気を引こうとする、そして — 嫉妬を感じた夫に対し、自分はその友人が好きになったと告白する。ここでドラマは、才気に満ちた好ましい対話のなかで頂点に達する。ルーシーは自分の本当の性質を明らかにすることができ、哲学的な苦しみのなかで四苦八苦している夫の心に、この非常に「ややこしい」問題を単純明快に解決する答えを提供する。彼女の日記の文面は夫に対する彼女の本当の姿を示している。彼は敗北した。女性だけが持つ武器によって、彼は打ちのめされた。このドラマの心的葛藤は、まさに愉快的な方法で解決される。

無邪気なこの二人以外の人物に、ドラマのストーリーの結節点となっている仕事熱心で活発な弁護士と、体つきからして当然運命の女神の絡んだ糸を解きほぐすことのできる漫画雑誌に出てくるようなボルン少尉がいる。さらに弁護士の妻。彼女は勤勉でかつ尊大である。残念なことに、対話は戯曲の終わり頃になると叙事的冗漫さに陥り、ドラマの舞台効果のかなりの部分が失われた。

『日記』の上演は優雅さと好ましさによって、アンツェングルーバー後の演目のなかで一つの休憩所となった。このひと時の休息の後、われわれは再び大きく高まる波を期待してよかろう。

- r -

収容所展望

今年、冬の到来はぐずぐずしていたが、今はもはや立ち去りたくないのではないかと思われる程にわれわれの所は冬にとって居心地がよさそうである。月曜日には 20℃の猛烈な南東の風が吹き、全ての山の雪は融け、春の到来が近いことを感じさせた。しかし翌日には、山の連なりはその分いっ

そう雪に深く覆われ、白くなった。それ以降、氷のように冷たい北西風が間断なく吹き、今では悪臭を放つ木炭の入った火鉢の火が消えないようにせざるを得なくなっている。こうなると頭痛か風邪のどちらかしかない。しかし、春が来るまでそんなに長くはかかるまい。というのは、大雨が降ると収容所の中庭は一面湖になってしまうので、春の土砂降りに備えて排水溝の掘り下げが進められているからである。

収容所には三つの井戸がある。しかし、残念ながら三番目に掘られた井戸もだめになり、厨房用には、学校にある井戸から再び水を運ばなければならない。二つの井戸は徹底的に清掃されたが、そうしても水の塩分は取り除かれることができなかった。上質の井戸水だけを洗濯や清掃用にも使用したために、真水を枯渇させ、消防ポンプ小屋横の井戸に塩分を含んだ水が流入する原因となったことは疑いない。

先日、フェリックス、すなわち手入れの行き届いたアライグマの毛皮をした可愛らしいスピッツ（？）がまたもや姿を現した。プラム（梅）の花が咲いている所へ遠足する途中、この小犬は大谷に留まったのだが、立派な収容所の料理と遊び仲間のヤーコプが待っていると思うと、古くからの故郷である収容所を再び見るまで、落ち着けなかったのだ。収容所へ帰り着いた際、この子犬がなついていることに対し、特別な食べ物を与えられていたと願っていたのだが。

昨日、東京の公使館から二人のアメリカ人がわれわれの収容所を訪れた。その視察には日本側から収容所将校の他に、衛戍¹ 司令官も加わった。一行は部屋を一つ一つ見て回り、全て問題ないと見たようだった。収容所内に何か不都合なことがあるという話もなかった。何か困ったことはないかと尋ねられたとしても、せいぜい客人達に、多くの者に困ったことは何もないと答えるしかなかっただろう。

昨夜、火災騒ぎによって眠りを妨害された。そうしたことは何も珍しいことではないので、私のように眠りを妨げられた人はほとんどいなかった

1 「えいじゅ」と発音、陸軍駐屯地の意。

ようだ。三番目の橋の傍らの旅館が焼失した。消防隊はよく組織されていると認めざるを得ない。というのも強風が吹いていて、火は容易に隣接する家に燃え移りかねなかったからである。こうして火事は火元で食い止められた。

楽団は最近週に2日練習を休んでいる。楽器練習をしている仲間たちにも、一定の期間練習を休ませることはできないだろうか？今は、一日中いつでもどこかで誰かが楽器を練習しているのを聴くことができる。そのことは、タフな精神の持主にとってもかなりこたえる。そうでなくても収容所は騒音で騒がしく、バイオリン等々の練習は関心のない聴衆にとって何の楽しみでもない。多くの者は受けている授業のために何かしたいのだが、絶えず色々な音が鳴り響いて、それから逃れようもなく、考えを集中することができなくなってしまっている。もし本物の音楽を聴こうとすれば、練習は必要悪であることを楽団に対して認めよう。しかし、ものには一定の限度がある。

愛書家にとって喜ばしいことに、われわれの図書館では本がさらに500冊増えた。そのことによって私の文筆活動の成果への関心が後退するのではないかと、心配になるほどである。結論的に言って、私はそのことで気を悪くすることはない。私自身も記事を読むのは、とりわけ校正のためとなるといやだし、それがたいいてい昼寝の時間とぶつかるのだ。

私自身は、ほとんど昼寝の時に、校正のための記事をいやいやながら読んだ。だが今、私はこれ以上個人的な話をするのはよそう。でないと、自己矛盾を起こしてしまう。

時代は目下のところ、急を告げているように思える。あらゆる外国の新聞は、ドイツがヴェルダンで戦争の決着をつけようとしているとの記事で満ち溢れている。そうであれば、それ以上願ってもないことである。というのは、もしわれわれの軍司令部がそのような意図で攻勢をかけるとすれば、自身の企みを成功のうちに実行するのに必要な手段を持っていると、われわれは確信することができるからである。いずれにせよ最初の段階で

はっきりしたのは、大仰に騒ぎ立てる外国の自称専門家が、ドイツは西部戦線でさしたる攻撃ももはや行うことができないと誤って予言したことである。フランスの報道はヴェルダンへの攻撃は撃退されたと述べているが、望むらくは、その攻撃が今までと同じように続かんことを！

図書室

他の収容所との交換を通して、われわれは今週中におおよそ 500 冊の新しい書籍を入手した。その内訳は、まず第一に長編小説、物語、そして笑話集等々である。これらの書籍は近々われわれの図書室に加えられ、今週水曜日以降貸出しができるようになるだろう。公共の利益のために、出来るだけ大事に取り扱うよう再度お願いしたい。

新 聞

今収容所では何種かのドイツ語日刊紙と週刊誌を読むことができる。これらを収容所全体が利用できるようにするために、新聞綴じに綴じ、全ての班に回覧する。それぞれの新聞綴じを一班あたり最長二日間利用できるが、もっと速く回し読みすることが望ましい。新聞綴じは班長から手渡され、また班長に返還するものとする。新聞綴じをしばしば新しいものと取り替えないためにも、それらをきちんと綺麗に保つよう心掛けなければならない。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 91 問の解答

1. Sd6 - e4 任意の手
2. D で詰み

第 92 問の解答

1. Lg5 - h4 Kd5 - e6
2. Dc2 - f5+ Ke6 x f5
3. Sb5 - d4 詰み

第 92 問、その他のの解答

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. e7 - e5 | 1. e7 - e6 |
| 2. Sd7 - b6+ Kd5 - e6 | 2. Dc2 - c3 任意の手 |
| 3. Dc2 - g6 詰み | 3. S で詰み |
| 1. La8 - b7 | 1. Sb2 - d3 |
| 2. Dc2 - b3+ Kd5-e6 | 2. Dc2 - c4+ Kd5 x c4 |
| 3. Sd7 - b8 詰み | 3. Sd7 x b6 詰み |

正解を送ってくれたのは、ヨーゼフ・ヴェーバーである。

第 93 問

白 : Ka3, Dg5, Tg4, h8, Lg1, Sa6, c3, Bb2, e5

黒 : Ka3, Le4, Sf2, Bc4, d5, e6, g2, g3

2 手詰め

第 94 問

白 : Kg8, Dc2, Ld3, h4, Bb4

黒 : Kf6, Sg4, Be7

3 手詰め

青島での苦難に満ちた日々から（6）

しかし、上の方から全ての人びとが無事帰って来た。「主よ、私はあなたからの至福を待っています。」その夜はかなり静かに過ぎて行った。ただ遠くで砲弾の着弾する音が聞こえた。

6日。午前11時頃、突然重くのしかかるような黒い雨雲が通り過ぎて行った。

二人の負傷兵が死亡し、二人の別の負傷兵がやって来た。

戦闘がやんでいる間、私はいろいろなものを取りに行くため、もう一度家に戻った。ベランダの下で、安全な避難所に避難していたかつての赤十字会員二、三人と出会った。その家を警護してくれる約束を、私は彼らから取り付けた。彼らは警護を引き受けてくれた。呼んだわけではないが、彼らが姿を現してくれたので本当に嬉しかった。学校の生徒たちの持ち物は、整理して鍵のかかる部屋に保管しておいたわけではなく、ただ自分たちの部屋に放りっぱなしになっていたのだが、うろつき回る無頼の徒によって盗まれてしまった。居住用の建物にとって、彼らが居合わせてくれることは確かに防御の意味を持っていた。庭に雌牛の大きな群れがいて、あらゆるものを踏み荒らし、そして食べ尽くした。豚や山羊、野良犬もその中にいた。しかし、秩序を作り出す人はだれもいなかった。その上、壁も砲弾で木端微塵に砕かれ、家畜の群れの侵入を防ぐことができなかった。家の屋根の端の一部分が、28センチ榴弾の破片によってたたき落とされていた。それ以外の損傷はなかった。

その日、町は西方からも砲撃された。小泥窪砲台は弾丸が不足していたため、爆破されなければならなかった。その他の砲台も、次第に弾丸を撃ち尽くした。ドイツ人飛行士は早朝に青島を離れ、無事中立地帯へ行った。日本人飛行士が通常の爆弾の他に、文書も投下した。それは、船舶など現存する軍需資材を破壊することはしないよう、ドイツ人の気高さに訴えようとしていた。だが、このアピールは、日本軍砲兵隊が力づくでそのよう

な破壊を行った後になされたため、遅きに失するものだった。

午後、もう一度街中に行った。総督府も裁判所も、海からの重砲によって甚大な損害を被っていた。

夜 7 時に、最後の戦いが始まった。恐ろしい激しい砲火の音、榴弾が絶え間なく炸裂する音、機関銃のタッタッという音が一晩中聞こえた。爆発する砲弾の光りやサーチライトの明かり、そして騒然としている様子が暗い夜空に映し出されるのが見えた。

私の聞いた突撃の経過は次のとおりだ。第三と第四の歩兵堡壘が特に激しく砲火を浴びた。最初に第四歩兵堡壘が突撃を受けた。しかしその突撃は撃退され、堡壘のなかに侵入した日本人は手榴弾で追い払われた。これに対し、第三歩兵堡壘の歩哨は地下壕へ撤収した。休みなく砲撃が加えられ、日本人がその堡壘を奪取した。その堡壘が奪い取られることによって、後のことは必然の成り行きのままに展開していった。イルティス山砲台は奪い取られた。砲台配置要員のアイエ（海軍中尉）は背後からスコップで倒された。次いで、第二堡壘と第四堡壘が背後から攻撃された。5 時 30 分頃、彼らは降伏しなければならなかった。6 時 23 分頃、観測所に白旗が掲げられた。

完

あるフランス人の日記（1）

この記事は『キール新報』から取り出したものである

以下の報告はフランス人歩兵将校の日記の抜粋である。彼は 1915 年 10 月半ば、シャンパーニュ地方でドイツの捕虜になった人物である。

9 月 24 日。昨晚、われわれは塹壕に入った。早朝およそ 6 時頃、われわれは攻撃に取り掛かった。われわれの兵力はとてつもなく大きかった。

76 個師団が加わっていた。そのうち 15 は騎兵師団だった。3,000 門以上の砲があり、そのうち 350 門の砲がわれわれの前線部隊に配置された。われわれは三日間撃ち続けた！今日はものすごい音だった。敵は少しばかり撃ち返してくるが、激しくはない。奇妙なことだ！12 時間以内にわれわれは戦いの真ただ中にいるだろう。ひょっとしたら私は死体になっているかもしれないし、あるいは、そうはならないかもしれない。誰にも分からない。今ここにいる者の多くは、元気に笑っているのに、数時間後には死んでいることだろう。私はおそらくまだ 8 時間ないしは 10 時間生きるかもしれない。それでよかろう。私は自分の義務を果たし、部下の先頭に立って戦場で死ぬ。しかしながら、私は自分の運を当てにしている。もし私が難局を切り抜ける運の持ち主なら、勲章をきっともらえるだろう。われわれは感激に浸っている。兵卒たちの意気はすばらしい。われわれのおこなう突撃で決着がつくだろう。

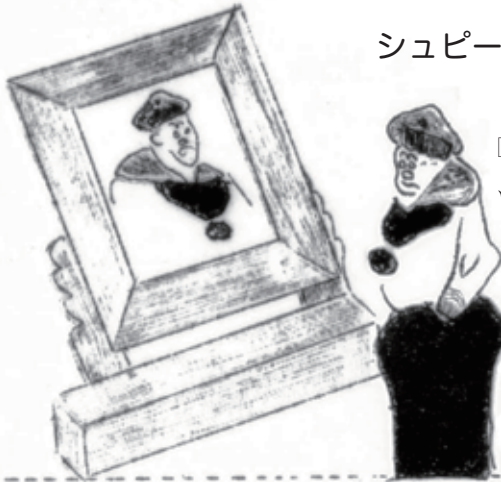
つづく

シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』

第2巻第24号
(1916年3月
5日)

ユーモア付録



3月1日以降

あそこに二隻のイギリス汽船が見えるかい？

どこに？



はて、今はドイツのUボートしかを見あたらないぞ！

母の夢！

古い壁掛け時計がチックタック鳴り

うとうと穏やかに母は眠りに落ちた。

彼女は壁の傍らの肘掛椅子に座り

便箋を手にしている。

それは戦場にいる息子からのもの

息子の書く手紙はすべて、彼女にとって英雄の手紙なのだ。

向う見ずにも、彼は敵の間を忍び足で歩き

そして橋を爆破した。

その行為は見事で、幸運が彼に宿った。

彼は無傷で無事帰還した。

今や彼は将校となり

勲章で飾られている。

母は夢のなかで息子に会い

もう平和の鐘が聞こえている。

勝利の女神が微笑んだのだ！

勝利者が入城する日だ！

彼らは上機嫌で行進して来る

鉄兜はオークの葉で飾られ、
旗が翻り、音楽が響き渡る。
老いも若きも歌い、歓呼する
見よ！十字勲章と大綬で飾られている若き少尉が、
隊列から走り出て、子としての喜びにあふれ
母を胸に引き寄せる。

我慢強くあれ！
神は大いに目を
かけてくれるだろう。
われわれが愉快的
時を過ごすように！



戦争の予測

ラインの川辺には未だにフランス人は一人もおらず
ヘルゴラントに上陸した敵船は一隻もない
ロシア人は足をとられている。
未だに自国のステップの砂のなかに！
世界が破廉恥な奴で溢れようとも
ドイツ、そこはきれいなままである

同音異義語

音楽家は毎日われわれを使っている、
彼はわれわれを前にして、好きなものを演奏する、
それ以外では、時として外交官はわれわれを交換する、
戦争行為に移る前に。

第 23 号のなぞなぞへの解答

魔法陣：

Lotse (水先案内人), Katze (猫), Aster (アスター), Satte (牛乳鉢)
真中の文字は T である。

アナグラム：Belgrad (ベルグラード)

U パズル：Unterhose (ズボン下)

上の同音異義語の答えは Note (楽譜、通牒))